レオナルドの報告書

レオナルドの報告書

村松友視

徳間書店

レオナルドの報告書

第一刷／一九八九年一二月三一日

著者　村松友視　発行者　荒井　修　発行所　株式会社徳間書店

東京都港区新橋四―一〇―一　郵便番号一〇五　電話〇三―四三三―六二三一　振替東京四―四四三九二

印刷所　本文・三晃印刷㈱　カバー・近代美術印刷㈱　製本所　大口製本印刷㈱

定価は帯・カバーに表示してあります。落丁・乱丁本はお取替えいたします。

©Tomomi Muramatsu 1989 Printed in Japan.

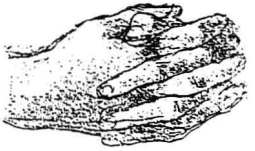
〈編集担当　国田昌子〉

一、三〇〇円
（本体一、二六二円）

ISBN4-19-124105-2

レオナルドの報告書

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.



目次

第一章……5
第二章……43
第三章……80
第四章……121
第五章……144
第六章……173
第七章……199
第八章……219

装丁　井上正篤
レオナルド・ダ・ヴィンチのデッサンより

第一章

レオナルド・ダ・ヴィンチは、この霧の多いこの地において、独自の空気遠近法をあみ出したと言われています……梅原健は、ディレクターの湯川と打合せたセリフをカメラに向って反芻すると、大きく息を吐き肩を上下させた。吐いた息が白くなって宙に漂い、すぐ風にかき消された。その風の行く手に、湖をぼんやりと見つめている黒木俊一郎の猫背があった。小波さえ立たぬ水面を、黒木は何かを念じるように目を注いでいる。そのうしろ姿が、一瞬、子供のように見えた。

（この男と折合いをつけるのはしんどいな……）

梅原は、きのう空港で生じたのと同じ呟きを呑み込んだ。

ミラノ空港のターン・テーブルの前でバッグを持ちながら、梅原は不安げに何度も待合室の

方をふり返った。テレビのスタッフ達はパリから時を合わせてミラノへ入り、日本から直行する梅原と空港で合流することになっていた。だが、どちらが早く着く便だったのかを、梅原は忘れてしまっていた。通訳兼ガイドの黒木俊一郎という人物が、ローマからミラノ入りして空港で待っているはずですから……ディレクターの湯川からの電話の声が漠然と梅原の耳に残っていた。スタッフがいるのか黒木がいるのか、いずれにしても向うから声をかけてもらうしかない。成田からパリで乗り継いだ長旅の疲れよりも、これから仕事を共にする仲間との出会いに神経をつかっている自分が奇妙だった。

そのとき、すでに荷物を手に持ったドイツ人らしい男が、待合室の方へ出て行った。イタリアへやって来たドイツ人を日本人である自分が見送っている……この構図が、梅原にはおかしかった。

「今度はイタ公抜きでやろうぜっていう話、知ってるだろ」

「ああ、日独伊で戦ったけど、イタリアがドジで負けたから、今度こそ日本とドイツで統一戦線を組もうっていうやつだろ」

「いまだに、ドイツ人は日本人に会うとそういう囁きをするっていう話ね」

「危ないノスタルジーだね……」

「でもさ、これは一種のジョークだよね」

「そりゃそうだろうさ」
「ところがね、こんな話もあるのさ」
「……」
「ある空港でドイツ人らしい男を見つけたので、そっと近づいて同じことを囁いてみた奴がいるんだ」
「つまり、今度はイタリア抜きでやろうぜと、日本人がドイツ人に囁いたわけだ」
「するとそのドイツ男は、何となく白けた顔をしてその言葉を無視したらしい」
「やっぱり、あれは誰かの上手な作り話なのかね」
「そう思ったけれど、そいつはさらにしつこく同じことをくり返し囁いたんだってさ」
「相手は面くらったろうな」
「何度囁いても相手は無視していたらしいんだけどね、やがてマジな顔になってじっとそいつの目を見て、その話はいずれゆっくり話そうって言ってから、すーっと離れて行ったと」
「じゃ、あれはやっぱりドイツ人の本気だったんだ」
「さあね」
「さあねって、あとでゆっくり話そうって言ったんだろ」
「それも、その男のジョークかもしれないだろう」

「そうか、ジョークに対してジョークのお返しをしたってこともあるな」
「で、どっちだと思う?」
「さあ……」
かつて親しかった詩人兼ルポライターの白河と、そういうやりとりをしたのはいつのことだったか、待合室へ出て行ったドイツ人らしい男の背を見送りながら、梅原はそんなことを考えた。左右の手に大きい旅行用バッグをぶら下げたその男が右へ切れると、正面からじっとこっちを見ている男と目が合った。男は東洋人らしかったが、唇もとに薄笑いを浮べ、首をぐいと前へ差し出したその表情から、梅原は写真で見たローレンス・オリヴィエのリチャード三世を思い出した。そのとき、梅原は男が通訳兼ガイド役の黒木俊一郎だと直感した。
梅原が自分のバッグをターン・テーブルから取り上げて自動ドアを出ると、人垣の最前列にいたリチャード三世が、「こっち……」というふうに指で右側を示した。かるくうなずいて通路を右へ歩き、出迎えの人々の群れが切れたあたりまで来ると、そこに小柄なリチャード三世が立っていた。彼は、ニヤリと笑って手をさしのべた。その手を握り返したが、彼の方では指に力を入れていなかった。まるで神父の手でも握らせてもらったようなかたちになったので、梅原は苦笑いをした。
「彼らは、まだのようですな……」

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.

リチャード三世は、ちょっと税関の方を気にする表情を見せてから、腕時計をちらりと見やった。そして、

「ちょっと腹ごしらえをしておきますか……」

そう言って梅原の返事も聞かず、勝手に歩き出した。この重いバッグはどうするかな……そんなことを思ってもみたが、それを相談する相手ではなさそうだと思いつつ、梅原はリチャード三世の小柄な猫背のあとへ従った。

待合室の脇にあるコーヒー・ショップで、二人分のカプチーノとパンを注文したリチャード三世は、黒木俊一郎と記した名刺を梅原に渡しながら、顎で床を示した。馬鹿みたいにバッグを持って突っ立っていないで、そこへ置けばいいじゃないかという意味のようだった。どうやらテーブルへ坐るのではなく、カウンターで立って飲み食いをするつもりらしいので、梅原は二つのバッグを床へ置き、両脚で挟むようにして立っていた。それを見て、黒木はまたもや唇のはしをゆがめて笑った。

「こういうの、取り越し苦労ですかね」

梅原がそう言うと、黒木は首を振り、

「ま、用心するに越したことはないですからね……」

突き放すように言った。その声音には、俺はそんな素人じゃないがねというニュアンスがか

らんでいた。この男と折合いをつけるのはしんどいな……そういう呟きが生じたのはそのときだった。だが、こういうタイプの方がむしろ与しやすいという感覚が、梅原の軀のどこかにあるのも事実だった。

「今回の取材は、どういう主旨ですか」

カプチーノにパンを浸して食べながら、黒木はすでに承知しているはずのことを確かめるように聞いた。だが、その言葉にはスタッフに対しての立場は、梅原と自分は同じ部外者だという親近感も表われていて、どうやら複雑な意識の流れをもった男のようだと、梅原は黒木の表情をながめた。

「いや、それをこれから相談しようってことになってるんですが」

「これから相談？　海外へ取材に出かけて来てしまってから相談したって、埒があかんことが多いでしょう」

「いや、取材の対象やスケジュールはもちろんそのままですが、考え方というかアングルをですね」

「アングルをねえ……」

「まあ、おっつけスタッフ連中もやって来るでしょうから」

「お忙しいですか」

「え」
「お仕事はお忙しいでしょう、日本では」
「まあ、せちがらいお国柄ですからね」
「あんなところではとうてい芸術は出来ん」
吐き出すような調子で言ったときの黒木の目が、急に熱をおびたみたいだった。
「今度の通訳兼ガイドの人は、ローマで絵を描いているらしくて、ちょっと癖のあるタイプみたいですが……」
梅原は、出発前に湯川がそう言っていたのを不意に思い出した。
「画家でいらっしゃるんでしたよね」
「まあ、絵を描いてますがね」
「ローマにお住いだそうで」
「いまは、ローマです。イタリアは初めて？」
「ええ」
「どうです、気に入りましたか」
「いや、まだイタリアの土も踏んでいないもんで」
「それはそうだ」

黒木は、初めて歯をみせて笑った。タバコのヤニが黒く目立っていた。
「実はですね……」
黒木は、真顔に戻って眉を寄せた。
「今回の通訳とかガイドの仕事、女房の代役なんですよ」
「奥さんの……」
「ええ、ちょっと急な旅行をしなければならなくなって。いや、ディレクターにはちゃんと連絡してあります。まあ、今回の場合はわたしの方が役に立つかもしれないし」
「そうですね、何しろレオナルド・ダ・ヴィンチの取材ですから、黒木さんの方が」
「いや、女房だってちゃんとやりますがね」
「それはそうでしょうが……」
「ただね、わたしはこういうのが苦手でしてね。ふだんは、ただ絵を描いて暮している人間ですから、対人関係というのがどうも面倒で」
「なるほど、分りますね」
「それに、ホテルの部屋割りや何やかや、そういう雑用がねえ」
「はあ……」
「第一、わたしはテレビの人間というのがどうも性に合わんのですわ」

「あの、関西のお育ちですか」
「ええ……とにかくテレビの人間というのは苦手ですなあ」
「それは、どういう点で」
「軽薄でしょう」
「……」
「だって、いっぺんにいろんなテーマをかかえてやって来て、つまみ食いみたいに取材して番組を作るわけでしょう」
「まあ、そういうケースが多いかもしれないけれど……」
そこから先を言おうとした黒木は、不意に腕時計を気にしてコーヒー・ショップを出た。梅原は、あわてて足もとのバッグを持ち上げ後を追った。緊張が抜けたせいか、大きいバッグがやけに重く感じられた。何人かの人に前をさえぎられ、その脇をすり抜けて進むと、TVスタッフらしい服装の男たちと立話をしている黒木の猫背が見えた。
空港からミラノの街へ向う小型バスを黒木は用意していた。マリオという名の、黒木の弟子か助手といった感じの律義そうな青年が、せっせと機材を小型バスへ積み込み始めた。梅原は、両手にバッグを下げたまま、茫然とそのあざやかな手つきをながめていた。すべての機材を積み終ると、マリオは梅原の方へ手をさし出し、

「ミスター……」

と言ってバッグを持った。黒木をのぞく日本人の中で、あきらかに年長者である梅原に対して、青年らしい敬意を表わしているように見えた。あるいは、テレビぎらいの黒木が、あの男はレポーター役で来ている作家だとでも耳打ちしたのかもしれない……梅原は、短くなったタバコを大事そうにすっている黒木の横顔を、ちらりと一瞥してから、

「グラッチェ」

マリオに向って言ってみると、マリオはにっこり笑って見せた。顔に吹き出物のあとが点々と残っていて、その笑顔はさわやかな青年という感じではなかった。表情を固めているときのマリオにただよっていた律義さが消え、梅原の目には彼の顔が一瞬、油断のならないポン引のごとく映った。

(師匠が師匠なら、弟子もまた厄介なタイプってわけか……)

梅原は、黒木とマリオを見くらべた。黒木は、そんな梅原の表情を読み取ろうとしたらしかったが、タバコを足もとへ捨てて靴で揉み消し、小型バスの助手席へ乗り込んだ。そのうごきが黒木の黒い影を、忍者みたいに感じさせた——。

「あの人、大分むずかしいみたいで……」

ホテルのフロントと何やら苛立たしげに話している黒木の猫背をふり返ったディレクターの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.